

所蔵作品展

人間はどこにいる？

2019年 6月1日-7月15日



高橋清「ひと 1991-1」1991年

大理石、黒御影石、オニックス(台座) 50.1×39.5×31.8cm(台座を含めた寸法)

新潟市北区郷土博物館

福島潟を中心として豊かな自然に恵まれた旧豊栄市内では、写生や水彩画の制作がさかに行われていました。そうした地域性を反映してか、豊栄市博物館を前身とする新潟市北区郷土博物館には、自然を描いた作品が数多く収蔵されています。

それに対して、人間を主題として取り組んだ作品の数は多くはありません。しかし、風景画に人間が登場しないからといって、その世界が人間と無関係だということではありません。そこに人間の存在や暮らしを見出すことのできる作品も多くみられます。「人間を描かない」という意識的選択によって、作者の人間への関心のありようが逆説的に示されている作品もあります。また、人間を主題とした作品においても、作者の意図やメッセージは多様です。

この展覧会では、当館所蔵の美術作品から、9人の作家による12点の作品を展示し、それらの作品世界を通して「人間」の存在とそのありようを見つ

める機会といたします。

高野常与志の群像からは労働する人々の生きる喜びを、羽田信彌の母子像からは母親の切切たる愛執を、味方海山の百福図からはしたたかに生きる市井の人々の姿を見てとることができましょう。齋藤満栄が描き出した原爆ドームには、現実の人々と不在の人間とが対照されています。悠久の時間が堆積した古代の壁画を思わせる物質的な長沢明の画面からは、限りある生命への愛惜が浮かび上がり、富岡惣一郎の雪景には人間と自然との親和が映し出されています。眼に見えない人々の動線が交錯する本間公司の「橋」。人間存在を石という堅牢な素材で恒久化した高橋清の「ひと」（新収蔵品）。作者自身の生の痕跡を示す上田桑鳩の書。

「人間はどこにいる？」をキーワードに、作品・作者との対話を深め、美術作品の表現を一層深く味わってください。

高橋 清

TAKAHASHI Kiyoshi

1925—1996年、南蒲原郡森町村（現三条市）生まれ

高橋清「ひと 1991-1」（図版：表紙）

1991年 大理石、黒御影石、オニックス（台座）
50.1×39.5×31.8cm（台座を含めた寸法）

- 1943 新潟県立新潟中学校（現新潟県立新潟高等学校）卒業。
- 1945 海軍兵学校卒業。
- 1952 東京美術学校（現東京藝術大学）彫刻科を卒業。
- 1958 メキシコ古代美術研究のため、メキシコに渡る。ヴェラクルス大学彫刻部教授となる。
- 1960 第1回メキシコ彫刻ビエンナーレに出品。（以後、第2回（'64）、第3回（'67）に出品。）
- 1966 第30回新制作展に出品。以後、連続して出品。
- 1968 メキシコオリンピックでモニュメントを制作。
- 1969 帰国。金沢美術工芸大学で制作と指導を始める。
- 1970 第2回神戸須磨離宮公園現代彫刻展に招待出品。
- 1973 第1回彫刻の森美術館大賞展に出品。第4回中原悌二郎賞を受賞（ひと No.13）。
- 1971 「高橋清彫刻展」が神奈川県立近代美術館で開催される。
- 1975 バンクーバー国際石彫シンポジウム（カナダ）に招待参加し、《親和 No.10》を制作。
- 1980 第7回神戸須磨離宮公園現代彫刻展に《北風》を出品。新潟県民会館前庭に設置される。
- 1982 岐阜県美術館の前庭にモニュメント《第三の太陽》を制作。
- 1983 東京野外彫刻展に招待出品し、大賞受賞。
- 1988 メキシコ国立国際現代美術館で個展を開催。
- 1989 「新庁舎落成記念 高橋清彫刻展」が新潟市美術館主催により開催される。新潟市役所前庭にモニュメント《希望》が設置される。
- 1990 豊栄市博物館（現新潟市北区郷土博物館）に、モニュメント《希望に向う人》が設置される。
- 1996 逝去。

高橋清は、新潟県立新潟中学校（現新潟県立新潟高等学校）で学び、海軍兵学校で終戦を迎えました。東京美術学校（現東京藝術大学）で彫刻に取り組んだ高橋は、オルメカ、マヤ、アステカなどのメソアメリカ古代文明の造形に強くひかれ、1958年にメキシコに渡ります。そして、11年間に亘り、気鋭の彫刻家として同地で制作と後進の指導にあたりました。

自然（宇宙）への信仰から生み出された古代の神秘的で原初的な造形に触発された高橋にとって、堅固な石は永遠の存在を意味し、石彫とは「内に命を秘めた石に、人間の祈りの形を与える」ことでした。その仕事は、敗戦間際に毎日「死」と背中合わせで過ごした過酷な体験を経て、戦後に生き続けている自己へのとまどいと、人間の「生きる自由があること」への感動と希望を抱いて創造に立ち向かった高橋の「生」そのものといえましょう。

『ひと』は、高橋が終生探究を続けたテーマです。1989年、野外彫刻《ひとNo.16-1》（1990）のための習作として、大理石と黒御影石を組み合わせた二人像を制作しました。《ひと1991-1》はそこから展開した造形表現です。2つの楕円柱を結合した有機的な白い形態と、荒々しく鋭利な黒い形態。大理石のなめらかさと御影石の重厚な光沢。孤としての人間、そして人と人との結びつきという人間の存在のありようが、簡潔な柱状形態と、白・黒の陰影表現によって、時が凝固したかのように永遠化されています。「輝く太陽の下でそびえ立つ圧倒的な古代の石柱列に人間存在（のヴィジョン）を直感した」という鮮烈な感動の記憶を、高橋清は自身の造形によって蘇生させようと試みたのです。



「橋 '04-1」 2004年 木、石膏、アクリル絵具 71.2×140.2×90.8cm

- 1977 新潟大学教育学部中学校教員養成課程美術科(上越市)に入学。
- 1978 彫刻制作を渡邊利暲に師事する。
- 1979 第34回新潟県美術展覧会で県展賞を受賞。
- 1980 第35回新潟県美術展覧会で県展賞を受賞。
イタリアの国立ローマ美術学院彫刻科でエミリオ・グレコに学ぶ(1981年帰国)。
- 1982 新潟大学教育学部(上越市)を卒業し、同大学教育学部(新潟市)の研究生となる。
- 1983 第12回新潟県芸術美術展に出品し、連盟大賞を受賞。
- 1984 愛知県立芸術大学大学院彫刻科に入学し、古島実に師事する。
- 1986 同大学院修了。
第60回国展(国画会)に出品('90にも出品)。
- 1987 新潟県美術家連盟会員となる。
- 1988 新潟県彫刻会会員となる。
- 1997 中条町立乙中学校(現胎内市立乙中学校)50周年記念モニュメント《風の詩》を制作し、設置される。
- 2004 個展(会場 新潟市美術館)を開催。
- 2006 「第2回新潟の作家100人」(主催 新潟県立万代島美術館・新潟日報社・新潟日報美術振興財団ほか/会場 新潟県立万代島美術館(新潟市))に出品。
- 2008 個展(アートギャラリー万代島(新潟市))を開催。
- 2013 「本間公司彫刻展」が新潟市北区郷土博物館主催により開催される。
- 2018 個展(ギャラリーあらし(新潟市))を開催。
- 2019 「アトリエ本間」を開設。

本間公司は、新潟大学教育学部で塑像による人体彫刻を学び、イタリアの国立ローマ美術学院と愛知県立芸術大学大学院で研究を深めました。本間にとって人間像の制作とは、性格や感情をそこに表出させることではなく、かたちや量(ヴォリューム)の比例と調和の秩序を模索し、人体をひとつのコスモス(宇宙)として創造する試みでした。

1990年代半ば頃から、本間は彫刻における「量塊」よりも「面」への関心を深め、具象的な人間像から人間をとりまく世界の構築へと、作品の外観を大きく転換させます。板材(面)を組み合わせた構成への取り組みは、有機的形態から幾何学的形態の探究へと本間を向かわせました。イタリアの都市の広場の五角形、建物やアーケード、橋など至るところにみられるアーチの連なり——。かたちを律する秩序の手がかりを数理に求めて作品を構成し、そこで人間と世界の間を雄弁に語らせていったのです。

本間は《橋'04-1》において、曲線構造にアーチを組み合わせた造形により、そこに秘められた美の秩序を見出そうと試みています。しかし作家の挑戦はそこにとどまりません。「橋」とは離れた2つの地点を結びつけ、人と人とを出会わせる場です。本間は、私たちの意識も時空も超越するかのよう大きく湾曲した橋を、ダイヤグラムのように無数の人々の生の軌道が交錯する場と捉えたのです。

味方 海山 MIKATA Kaizan 本名 巳之吉と伝えられる 1863—1942年、新潟町（現新潟市）生まれ

味方海山は、文久3年、新潟町寄居白山外新田に生まれました。幼い頃から絵が上手く、京都の南画家田能村直入（1814-1907）のもとで修業したと伝えられています。その後は長崎や清国に遊歴し、指と爪先、てのひらを駆使して描く指頭画の技を磨きました。勝海舟（1823-1899）と親交を結んで号を受けられた海山は、全国各地を巡って、即興的な公開制作の活動を展開し、時には賓客に披露することもあったようです。晩年は北蒲原郡松ヶ崎浜村（現新潟市）に定住し、そこで生涯を終えました。

「百福図」の作例は、葛飾北斎（1760-1849）による絵手本『北斎漫画』（1814～1878に発行）が流布した江戸時代中期から明治時代にかけて多くみられ、100人やいはそれに近い多数の「お多福さん」が画面を埋め尽くす濃密な構図が一般的です。一方、爪と指を絵筆にして墨と淡彩で描かれた味方海山の作品には、のびのびと「あそび」に興じる45人の女たちがユーモラスに捉えられて

います。そのうち38人が座位で、動きの変化には乏しいものの、人物のグループ化とその配置の工夫により、画面全体にゆるやかな動感と軽やかなリズムが生み出されています。

「幸福とは、その反対の状態が存在する世界において意味をもつ」という考え方があります。つかの間の「時」を屈託なく楽しむ市井の女たちの幸福観を、この作品から垣間見ることができるでしょう。

「百福之図」岩絵具・墨、紙
137.5×61.5cm



齋藤 満栄 SAITO Mitsuei 1948年、北蒲原郡葛塚町（現新潟市）生まれ



「ドーム」2006年 岩絵具、紙 209.5×163.0cm

- 1968 多摩美術大学日本画科入学、翌年から横山操に学ぶ。
- 1972 多摩美術大学日本画科を卒業。
- 1973 第7回文化庁現代美術選抜展で《辰砂の静物》が文部大臣賞を受賞。
- 1974 堅山南風の内弟子となる。
- 1979 再興第64回日本美術院展に入選。
- 2006 日本美術院同人に推挙される。

- 2008 〈わたしと良寛〉(画・文 齋藤満栄)が新潟日報に掲載される(4.23-2009.3.31)。
- 2011 「新潟の画家たち」展(主催 新潟県立万代島美術館・新潟日報社/会場 新潟県立万代島美術館(新潟市))に出品。
- 2014 新潟市北区郷土博物館が「一収蔵作品公開-齋藤満栄展」を開催。
- 2016 第69回新潟日報文化賞受賞。
- 2018 「高島屋美術部創設110年記念 齋藤満栄展-良寛、芭蕉、西行に魅せられて-」が、高島屋日本橋店で開催(大阪店・横浜店・京都店で巡回)。

齋藤満栄は、多摩美術大学において、横山操教室の革新的な気風のなかで新しい日本画表現を模索した後、伝統的な表現に傾倒し、卒業後に堅山南風（1887-1980）の内弟子に入りました。79年に日本美術院が主催する再興院展に入選を果たして以後、同展を中心に制作と発表活動を展開しています。

齋藤は、師南風の没した翌81年から、花の写生に打ち込み、自然と対峙するなかで、時の移ろいにおける生と死のありさま（自然の相）を、絵画表現で試みていきます。

99年、ヨーロッパを旅行した齋藤は、オーストリアの都市グラーツにある教会の外壁画から着想を得て、現実の風景を、歴史的時間を超えた宗教的ヴィジョンに変換することを、《歴日》（1999）で試みました。この時間への挑戦は、《ドーム》において、より明快にみることができます。半世紀以上を経てもなお痛々しい姿で見る者を圧倒する原爆ドーム。絵具を盛り上げて焼け残った銅骨の存在を強調し、黄昏の光に死の荘厳さを暗示させています。画面下に描かれた来訪者の白い影が、風化した外壁と溶け合って、“その時そこにいた”人間の存在の痕跡や気配を私たちに感じさせます。

羽田 信彌

HADA Shinya

1935—2010年、北蒲原郡安田町（現阿賀野市）生まれ



「乳も出ない」（『野良の叫び』から）1970年
木版、A.P.
61.0×45.6cm

- 1958 多摩美術大学油画科を卒業。在学中から、国画会展、アンデパンダン展に出品。
- 1965 東京都内の中学校で美術教育に携わりつつ、木版画を始め、母子像や農民をテーマとして制作。
- 1973 北蒲原郡木崎村（現新潟市）に起こった小作争議（1922-1930）を取材し、『野良の叫び』の連作に取り組む（1988年に完成）。
- 1975 秩父事件をテーマとした『峠の叫び』の制作を開始。
- 1980 インターグラフィック'80（東ドイツ）に出品。1987年にも出品。
- 1988 「『野良の叫び』展」が豊栄市博物館（現新潟市北区郷土博物館）で開催される。
- 2010 逝去。

羽田信彌は、日本の近代化が生み出した社会の矛盾を、農民や労働者の困窮生活と彼らの闘争を題材とした版画作品を通して示していくことを、ライフワークとしました。

この作品は、北蒲原郡木崎村（現新潟市）の小作争議（1922-1930）を扱った連作『野良の叫び』に収められています。仄暗い空間に白く浮かび上がった母親の哀しげな顔と痩せた乳児の顔。この大小二つの楕円形が呼応して、私たちの視線を荒くれた母親の手へと誘導していきます。羽田は、説明的な描写を省いて、武骨な刻線と形態のデフォルメ、陰影の対比といった、ドイツ表現主義の画家・版画家ケーテ・コルヴィッツ（1867-1945）を思わせるドラマティックな手法により、農民の貧困を象徴的に表現しています。

しかし、作家の意図はそれ以上に、労働する母親の大きな量塊のなかに母子の生の一切を包含させることにあったように思われます。それゆえにこそ、私たちは、「食う＝生きる」という人間の「生」の究極を、この母子像から直截に見てとることができるのでしょうか。

高野 常与志

TAKANO Tsuneyoshi

本名 常吉

1924—1993年、北蒲原郡木崎村（現新潟市）生まれ



「県北の漁港」1979年
岩絵具・銀泥・金泥、紙
220.8×175.5cm

- 農業に従事しつつ小島丹彦に師事して日本画を学ぶ。
- 1951 第7回文化祭新潟美術展で奨励賞を受賞。以後、5回受賞。
- 1955 再興第40回日本美術院展に入選。
- 1957 日本美術院院友に推挙される。
- 1964 個展（第四銀行葛塚支店）を開催。
- 1966 水害義援金募集のために個展（長岡市商工会議所）を開催（1968年も開催）。
- 1974 個展（イチムラ百貨店新潟店）を開催。
- 1979 再興第64回日本美術院展に《県北の漁港》を出品。日本美術院特待に推挙される。
- 1985 「高野常与志展」が豊栄市博物館（現新潟市北区郷土博物館）主催により開催される。
- 1993 逝去。

高野常与志は、生まれ故郷の木崎村（旧豊栄市）で農業に従事しつつ、地域の自然やそこで働く人々を描いた日本画家です。新潟市在住の画家小島丹彦（1902-1975）に学び、師と同様に再興日本美術院展を活動の中心としました。

この《県北の漁港》には、高野の表現様式に特徴的な太く強い線描と素朴な形態により、自然を相手として働く純朴でたくましい人々の姿が描かれています。漁を終えた男たちと、彼らの収穫物を引き継ぐために集まってきた女たち。厳しい環境のなかにも生を謳歌する力強さがみてとれます。高野は、彼らの実直なありようを、モザイク壁画やタピスリーにみるような静的で堅確な人間像として描き、その存在を強調しています。「労働の意味と生きる喜び」のモニュメントであるといえましょう。



(図版左)

「鳥に舟」1999年

岩絵具、箔、土、和紙、綿布、木

162.0×230.0cm

(図版右)

「鳥と舟」2001年

砕かれた本、岩絵具、箔、鉄粉、石膏

104.7×91.7cm

- 1994 東京藝術大学大学院(日本画専攻)修了。
個展(ギャラリー・グラフィカ bis(東京))開催。以後、個展での発表を活動の中心とする。
柏市文化フォーラム 104 大賞展で TAMON 大賞を受賞し、渡米。
- 1997 ガレリア・グラフィカ(東京)で個展開催。以後、2001、04、06、08、10、12、14、16、18 に開催。
第 14 回山種美術館賞展に出品。
五島記念文化賞美術新人賞を受賞し、1 年間滞英。
- 1999 個展(ギャラリー・グラフィカ、村松画廊(東京))開催。
- 2001 ギャラリーヒラワタ(藤沢市)で個展開催。以後、2003、06、08、11、15 に開催。
「BOX ART 展」(~ 2003、リアス・アーク美術館(宮城)、新潟市美術館、高知県立美術館ほか)に出品。
- 2002 「長沢明展 1994 ~ の仕事」が豊栄市博物館(現新潟市北区郷土博物館)主催により開催される。
個展(楓画廊(新潟市))開催。
- 2004 東北芸術工科大学(山形市)で指導にあたる(2008 教授就任)。
- 2005 「長沢明展 2000 ~ 2004」(砂丘館(新潟市))開催。
- 2006 「MOT アニュアル 2006 No Border 「日本画」から/「日本画」へ」(東京都現代美術館)に出品。
- 2009 「ダイナミズムの源流」(東北芸術工科大学)に出品。
- 2013 個展「忘れていた絵 長沢明展」(高島屋日本橋店美術画廊X)開催。
- 2016 「第 5 回都美セレクション グループ展 キョウノドウキー矩形・そこに見る日本画の可能性」(東京都美術館)に出品。
- 2017 「詩情の森 語りかたられる空間」(KAAT 神奈川芸術劇場(横浜))に出品。
- 2018 金子富之との二人展「幻成する狂気」(蟹仙洞(上市市))により、山形ビエンナーレ 2018 に参加。

長沢明は、大学院修了後の発表活動の初期から、伝統的な「日本画」の画材に加え、土や木、鉄などの自然の素材、さらには古い既成物をも作品に取り込み、象徴性や具象的なイメージを喚起する作品を発表。日本画と現代美術の両分野から注目を集めました。

1997年から98年にかけて英国に滞在した長沢は、大英博物館の膨大な稀覯本のコレクションが放つ物質的な存在力に圧倒されます。そこに時間と知の堆積を直感した長沢は、帰国後に、古書を使ったインスタレーションやオブジェを発表し、表現テーマの幅を広げていきました。

絵というよりも物質そのもののような絵画《鳥に舟》(1999)も、英国体験直後に制作された1点です。まるで悠久の時を旅したかのように錆びついた巨大な舟は、人類の文明の歴史を象徴する存在として、画面のほぼ全体を占めています。この舟に堆積する途方もない時間に対し、小鳥=人間は、自らの存在のはかなさにたじろいでいるかに見えます。しかしこの舟は、威圧的な冷たい鉄の塊ではなく、生命を抱え込むあたたかな大地のようにも感じられます。それは、直線と曲線の簡潔な造形と、空間との巧妙なバランス、そしてマティエールの工夫等によって、この圧倒的な静的世界に、わずかな動感と生のぬくもりとが与えられているからでしょう。ともすると大きな船壁=大地は、「表現すること」を抑制し観念的な作品制作を展開してきた長沢が、再び向き合った新鮮な画面なのかもしれません。画中の小鳥は、ためらいつつもそこに描き出そうとする長沢明自身のようにも見えます。

2年後に制作された《鳥と舟》(2001)では、「舟」と「鳥=作者」との関係に変化がみられます。《鳥に舟》から一変して、舟の形態がダイナミックな動勢を得ています。鳥も、大きく翼を広げた形象と箔の効果によって、陽光を浴びて飛翔する姿に変貌しています。長沢明は、この後、堰を切ったようにためらいなく生命の躍動を描き始めるのです。



(図版上)

「雪. 福島潟 2」1993年

油彩、キャンバス

91.0×116.7cm

(図版下)

「雪. 福島潟 1」1993年

油彩、キャンバス

91.2×116.7cm

- 1939 新潟県高田市立高田商工学校（現新潟県立高田商業高等学校）を卒業し、三菱化成工業に入社。応召。
- 1946 復員、復職。広告宣伝部門でアートディレクターを務める傍ら、独学で絵画の探究を続ける。
- 1953 第17回新制作展に入選。
- 1962 第26回新制作展で新制作協会賞を受賞。
第5回現代日本美術展に新設された公募部門に《黒い線》を出品し、第1回コンクール賞を受賞。
第6回安井賞候補新人展に出品。
- 1963 第7回サンパウロ・ビエンナーレに出品。
ニューヨークで個展開催。

- 1964 「現代日本美術展」(コーコラン美術館(ワシントン D.C.)、後アメリカ国内巡回)に出品(～1965)。
- 1965 ロックフェラー財団招待留学生としてニューヨークに居住し、制作と発表活動を展開。
- 1972 帰国。日本の「雪」の取材を開始する。
- 1974 銀座・和光で個展開催。以後、1977、79、86を除き、1993まで毎年開催。
- 1979 新潟県美術博物館(現新潟県立近代美術館)主催の「県人作家三人展」に出品。
アメリカンセンター(東京)で個展「濃の墨絵」を開催。
- 1981 第3回日本秀作美術展(日本高島屋)に出品。以後、1989、90を除き、1991まで毎年出品。
中国桂林を取材。
- 1985 アラスカ氷河を取材。
- 1988 画集『富岡惣一郎 白の世界』(日本経済新聞社)を刊行。
- 1989 新潟市美術館主催の「新潟の絵画 100 年展」に出品。
- 1990 新潟県南魚沼郡六日町(現南魚沼市)に、財団法人八海山「白の世界」文化村 トミオカホワイト美術館(現南魚沼市トミオカホワイト美術館)が開館。
- 1993 豊栄市博物館(現新潟市北区郷土博物館)で「福島潟制作記念 富岡惣一郎 白の世界 雪・冬」展が開催される。
- 1994 逝去。

1965年に渡米して、当代の絵画動向と呼応した表現を探索していた富岡惣一郎は、日本の風土に根ざす作品こそが固有性と普遍性を持つということ、ほかならぬ異国の地で認識しました。豪雪で知られる新潟県高田に生まれた富岡が、72年の帰国後に「白の世界」を描くようになったのは必然のことだったのでしょうか。雪景描出に対する執念は、独自の油絵具「トミオカホワイト」の開発や、時にヘリコプターを使った徹底的な取材ぶりからも窺えます。

大規模な手法によるリアリズムから生み出される富岡の作品には、自然美の構造を際立たせた抽象的表現の傾向がみられます。その一方で、自然を巨視的に俯瞰したモノクロームの世界には、西洋の遠近法では捉えきれない無限の深さと奥行きがあり、そこに東洋的な世界観を見出すこともできましょう。

93年に初めて福島潟を訪れた富岡は、そのすがたに感動し、81年冬に空撮された同地近郊の写真をもとに2点の作品を制作しました。いずれも湿原から田園地帯へと広がる平坦な雪景が、白い面と黒い線の構成とで表現されています。《雪. 福島潟 1》は地形の起伏をとり込んだ風景画であり、《雪. 福島潟 2》はクローズアップによる抽象的構成としています。これらの2作品からは、富岡特有の、動かしがたい大自然を捉えようとする峻厳な視座とはいささか異なり、雪原の下に息づく生命やそこで暮らす人々への温かなまなざしを見てとることができます。富岡惣一郎は、福島潟を巡る里に、自然と生活との融和を見たのでしょうか。



「やわらかき…」 墨、紙(軸装) 140.0×34.0cm



「高啓詩『尋胡隱君』(渡水復渡水...)」 1968年頃 墨、紙(軸装) 138.0×34.5cm

上田桑鳩は、昭和という激動の時代において、長い歴史を有する書文化の新時代を切り拓き、漢字文化圏に固有の「書」を、「芸術」の舞台に押し上げることに尽力した書家であり、思想家です。上田が格闘した課題とは、西洋近代に確立された「芸術」の概念を援用して、「書」に、時代も国境も越える普遍的な「芸術の言葉」を与えることでした。

上田は「書とはなにか」を多角的な視座から問い、多彩な試みを行っています。その一つに、「時間性」への挑戦があります。上田は著書『臨書研究』(1940)のなかで「書は生命の躍動が定着された時間の芸術である」と主張しました。しかし自身の実践では、時間をとどめおくというよりも、より積極的に時間を創造しているように思われます。

ここに掲げた《高啓詩『尋胡隱君』》の墨線を目で辿ってみましょう。運筆の軌跡である墨線、つまり「上田桑鳩の生命の躍動」が、「文字」を生み出しながらさまざまな表情をみせて展開していくのを見てとることができるでしょう。そして、その墨線が緊張と動勢をはらんだ空間を生み出していく瞬間に、私たちは立ちあうこととなります。つまり、この作品は、作家が行為する時間を私たちに追体験させる「再現力」を備えているのです。私たちが作品を鑑賞することによって、上田の生きた時間が再現されるという「新たな生成」の場となるのです。

現代美術の手法の一つとして、鑑賞者を「仕掛け(作品)」のなかに参入させて作品を成立させる「環境芸術」という表現動向があります。書表現の新たな可能性を探求した上田の企てに、こうした特質を見出すことも可能ではないかと思われます。

私たちが「作品」世界に入り込んだ時、私たちが「作品」を生き、「作品」のなかで上田桑鳩がふたたび生きるのです。

- 1912 三田中学校(現学校法人三田学園)に入学。美術学校進学をめざす。
- 1919 宝塚町(現宝塚市)の上田家の養子となり、結婚。美術を断念し書を志す。
- 1927 上京し、二松學舎で学ぶ。
- 1929 比田井天来の門下となる。
- 1933 天来門下の手島右卿・金子鷗亭らと書道芸術社を結成し、『書道芸術』を創刊。
- 1940 新しい書表現を模索する研究会「奎星会」を結成する。『臨書研究』(上)(興文社)を刊行(下巻刊行は、1941年)。
- 1948 全日本書道展(第1回毎日書道展)に出品、以後継続して出品。第4回日展に第5科(書)新設され、出品を委嘱される。
- 1955 日展を脱退する。奎星会ニューヨーク巡回展を開催。
- 1961 第6回サンパウロ・ビエンナーレに出品。
- 1966 臨書冊を頒布する。
- 1967 三田方広寺(別称桑鳩寺)にて襖・屏風等数十点を揮毫する。
- 1968 逝去。

本刊行物の作成にあたり、次の方々からご協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。(敬称略)

齋藤満栄、長沢 明、本間公司

池田純夫、上田啓之、高野洋子(常敏)、高橋玲子、谷 哲夫、堤 一彦、富岡 秀、長谷川義明、羽田佐代
南魚沼市トミオカホワイト美術館

一 所蔵作品展 人間はどこにいる？

執筆・年譜作成：神田直子
(新潟市北区郷土博物館学芸員)

発行日 2019年6月1日
発行 新潟市北区郷土博物館
新潟市北区嘉山3452番地
印刷 株式会社アステージ